

## ■マルティナ売春本強即墮ち

魔物から世界を救うため、勇者と共に旅をしていたマルティナ。しかし魔王の手により勇者と離ればなれになり、更に妖魔軍王ブギーの手に墮ち彼の性奴隷にされてしまう。

「やめなさいっ♥♥ 魔王の手先なんか♥♥ 私は♥♥」

ドビュルルルルルッ♥♥

「負けっ♥♥♥ おほおほおほおほおほおっ♥♥♥」

後に解放されたものの……年齢相応の性欲が更にブギーの魔術と奴隷生活によって極端に引き上げられており、今なおマルティナは淫靡な感情に苛まれていた。

仲間と交わりわけにもいかないために夜な夜な自慰で性欲を鎮めていたが、それでも収まりが効かず……ついにぱふぱふ小屋ではぱふぱふ娘として働くようになっていた。

最初こそ資金のためと言い訳していたが、一度籠が外れれば転がるように溺れていき……旅の途中に町を拠点とした際には、仲間にバレないように町のぱふぱふ小屋で働くのが恒例となっていた。

「あはっ♥ ほおら、ぱふ♥ ぱふ♥」

抜群のプロポーションに似合うバニースーツを纏い、客の男根を胸で扱く。豊満な胸はもちろん、強気で上品な顔立ちと甘えた声のギャップも男心を刺激し、客はすぐさま限界に達する。肉棒を脈打たせると、挟射……谷間の中に精液を放つ。

「ふふっ……出た出た♥ 気持ち良くなってくれた？ ありがとうございます、オチンポ様♥」

客が満たされ、それにより女としての悦びを得るマルティナ。顔射の言葉をかけ、客に満足してもらおうが……

(そろそろ……これだけじゃ、足りなくなってくるわね……)

客は絶頂できても、マルティナの方は満足できていなかった。

最初こそ、淫らな仕事をするだけである程度 性欲を解消できていたのが……次第に慣れていき、更に刺激が欲しくなる。

今行っているぱふぱふ……胸での性戯だけでは精神的には気休めになっても、肉体……本能の芯は満たされない。

(でも、これ以上は、流石にね……)

とはいえ、簡単に挿入以上の行為を認めるわけにはいかない。

しつこく本番を求める客もいるが、そこはマルティナに残った理性で拒み続けていた。

(これはこれで楽しいし……さ、次いきましょ♪)

気を取り直し、次の接客へ。部屋で待っていると、新たな客……若い少年が入ってきた。

「いらっしやい……あら、なかなかの二枚目クンじゃない♪」

【よろしく～♪ お姉さんもすごい美人だね……お世話になりま～す♪】

挨拶しつつ近寄り合い、早速互いにボディタッチしていく。この店は手っ取り早く『済ませる』ことに特化しているのだ。

【うはっ、スゴいおっぱい……触っていい？】

「もう揉みまくってるじゃないの♪ 若いのに慣れてるわね……人生おかしくなっちゃうわよ？」

【こう見えて経験豊富なんだよねー。てかお姉さんこそ、もっといい仕事あると思うけど……ぱふぱふ娘やってるなんて、もしかして相当ドスケベさん？】

「ふふ……どうかしらねえ？」

妖艶な視線を送り、敢えて返答を焦らす。淫魔じみた眼で覗き込むことで少年の意識と視線を自慢の胸に誘導すると、優しく彼の頭に手を回す。

「もう、我慢できないって顔してるわね……ほら、こっち来なさい♥」

甘やかす声と共に、少年の頭を抱き寄せる。

軽薄そうに見えて内心では興奮していたのか、少年は一切抵抗せず、吸い込まれるように密着すると、顔を深い谷間に埋もれさせていく。

「ほお～ら……ぱふ♥ ぱふ♥ ぱふ♥ ぱふ♥」

顔を胸で挟み、軽く圧迫。マルティナの爆乳が誇る圧倒的量感、弾力と柔らかさを合わせ持つ極上の肌質・乳質はもれなく男を魅了する。

少年も例外ではなく、幸せそうにして胸圧迫の感触を味わっている。

ただ、少年はそれだけでは満足できないらしく……顔で胸奉仕を堪能しながら、マルティナに手を伸ばす。だがその手が腰に回ったと思うと、尻まで滑り……股間に向かって行く。

「こら、それ以上はダメよ♪」

【えー？ ちよっとくらい……】

この店では胸中心の前戯のみのサービスを提供している。

軽いボディタッチで尻ぐらいならともかく、女性器部分は店の規則によってNGだ。

「ダメなものはダメ♪ おっぱいだけで我慢しなさい♥」

【どうしても？ こう見えてけっこうカネあるよ？】

「生意気なこと言わないの。そこから先は、お店の人に怒られちゃうのよ」

【内緒にすればいいじゃん。お願いだからさー】

「ダメったらダ〜メ。ワガママ言うなら、おっぱいで窒息させるわよ？」

予想に反してしつこく迫ってくる少年を、強く抱きしめる。顔ほどもある乳肉に少年の鼻と口が埋まりそうになり、少年は慌てて謝罪する。

【うぷっ！ わ、わかった、わかったから……】

「じゃ、大人しくしなさい。おっぱいならいくらでも味わわせてあげるから……♥」

(本番ナシって知ってて、どうして男って……)

この店は前戯のみであることは、客も事前に承知済みのはず。にも関わらず、マルティナが相手した客はかなりの割合でそれ以上を求めてくる。

マルティナの美貌につい魔が差したのかもしれないが……こうも本番強要が多いと、マルティナとしては何とも困る。

といっても、ルールを守らない悪質さに嫌気が差す、という意味ではない。

(そんなに求められたら……余計に疼いちゃうじゃない……♥)

マルティナとしては、むしろ本来はがっつりと貪り合うような、爛れた行為に耽りたいのだ。

しかし一応、今は勇者と世界のために戦う女闘士。本番ナシの店だからこそ一線を超えた行為に至らず、そのおかげで自制を保っているようなもの。

何度も何度も男に種漬けを要求されると、嫌でも牝としての本能が疼かされ、欲求が澱のように胎の底に蓄積されていく。

(私だって、本当は……)

「……って、こら！ そこはダメよ！」

悶々とした感情に苛まれる内、また少年がルールを無視して股間に触れようとしていた。

パシンと手ではたくと、少年はつまらなそうな顔をして一旦離れる。

【なんだよ、ドスケベ女のくせに一。ちゃんとゴムもあるからさー】

「スケベなのはお互い様でしょ。もう、溜まってるなら手でも胸でも又いてあげるから、それで済ませなさい」

やはりこの少年も注意を無視して求めてきた。調子乗らせるわけにはいかず、締めにかかろうと逆に要求する。

【そう言ってホントはマルティナさんがチンポ見たいだけでしょ？ しょうがないなあ……】

何とも都合のいい言葉に飽きれるマルティナ。自慢げに言っているが、こんな少年の一物などたかが知れている。そう思っついで溜息が出てしまう。

だが少年が下着を下ろすと……

「ッッ?!♥」

(でかっ♥ 何よその巨チンっ♥ 殺す気なのっ?!♥)

優男な顔からは想像もできなかった、見事に反り返る黒々とした男根に眼を見開かされる。  
少年のペニス……それは今まで見たどの男たちよりも逞しい精気を放つ巨根であり、体格に見合わぬ巨大さで雄としての力を物語っていた。

そんなものを見てしまい、マルティナは一瞬にして萎んだ性欲が昂ぶり返す。

精力に満ち満ちた硬度、牝を孕ませるための暴力的な形状。晒した途端にツンと嗅覚をくすぐる雄臭。

それらは欲求不満に疼いていた牝の身体には媚毒以外の何物でもない。

(は……ハメたい♥ でも……♥)

【どうしたの? もしかして気が変わった? ハメたいって思ってるでしょ】

「そ……そんなことないわよ♥」

つい釘付けになってしまっていた。見透かされているだろうが、ルールはルール。断るが、少年は図々しく取引を持ち出す。

【さっき、又いてあげるって言ったよね……てことは、ちゃんと気持ち良くしてくれるんだよねえ? じゃないと詐欺ってことになるんだけど】

「……………もちろんよ……」

性戯……特に胸を使った責めと奉仕には自信がある。巨根に見惚れたマルティナは、つい少年の挑発に乗ってしまう。

【じゃあもし、ぱふぱふでこのチンポを満足させてくれなかったら……その時は、詐欺で訴える代わりに本番させてもらってもいいよね?】

(落ち着いて……♥ こんな子の挑発に乗るなんて……………でも……♥)

「……わかったわよ♥ ぱふぱふだけで昇天させてあげるわ……♥」

よくよく考えれば、筋の通っていない少年の言い分。マルティナも内心で自分を言い聞かせようとしたが……自信と期待。積み重なった性欲に舐まれてまともに理性が働かず、思わぬ賭けに乗ってしまっていた。

【賭け成立だね♪ じゃ、前言通りパイズリで又いてもらおっか。ま、できたらだけだね♪】

「舐めないで……♥ そ、そんな……大きいだけのチンポ♥ すぐ、又いてあげるんだから……♥」

(つい見惚れて賭けに乗っちゃったけど……なんとかぱふぱふだけで済ませないとマズいわ♥

あんな女殺しのデカチンポ♥ ゴム有りでも孕んでしまうっ♥♥)

今まで、マルティナのパイズリで達しなかった男はいない。経験から、彼を満足させる自信はかなりある。だが、もし少年を満足させられなかったとしたら。

かつて自分を墮としたものを彷彿とさせる肉幹に、受精し妊娠するまで徹底的に騷り物にされるだろう。

頭と肉体、そして精神にこびりついた快楽をぶり返しながら、それでもマルティナは今の己を保つため、理性

のために少年を蠱惑的に睨みつけた。

「さあ、本気の……会心の ぱふぱふ♥♥ とくと味わいなさい……♥♥」

——……  
——……………

ぱん♥ ぱん♥ ぱん♥ ぱんっ♥  
「おっ♥ ん♥ あ♥ あいっ♥」

ベッドの上で四つん這いとなり、バニーの耳を乱暴に引っ張られ後ろから巨根に騎られているマルティナ。その表情は甘く蕩け、心なしか腰は少年の注挿に合わせて前後し、秘部からも愛液を垂れ流して悦びを訴えている。

……自信を持って受けた、本番を賭けての乳奉仕。  
しかし巨根に気を取られて性戯を上手く出せず、それどころか逞しい肉槍を見せられると腰が浮いてしまう。胸で扱くたびに胸の感度が高まり、その状態で乳首を弄られると容易く嬌声を上げさせられる。その隙に秘部を触れられ、抵抗するものの……抵抗は言葉だけで身体は全く拒んでいないことを見透かされ、早々に挿入されていた。

巨根は注挿直後からマルティナを牝として追い詰め、ゴム越しでありながらその大きさと形状を肉壺に刻み込んでいく。  
更に凄まじい精力により肉突きがいつまでも終わらず、何度とないゴム出しのたびに牝肉が絶頂へと押し上げられていた。

ぱん♥ ぱんっ♥ ぱんぱんぱんぱんぱんぱんっ♥♥  
「おっ♥ んひっ♥ は♥ 激しっ♥ あ♥♥」  
(また出される♥ また♥ 中にいい♥♥)  
ゴブ♥♥ ドビュルルルルッ♥♥  
「あああっ♥♥♥ またっ♥♥♥ また出てるっ♥♥♥ んぎいいいいっ♥♥♥」  
(何発も出してるのに……♥♥♥ ゴム越しなのに……♥♥♥  
このおちんぼ♥♥ スゴすぎよお……♥♥♥)

何度出しても衰えない少年の肉剛。それがまた肉壺の奥深くを薄皮越しに撃ち抜いてくる。例えゴムを介していてもその威力は高く、またもマルティナは大きな絶頂に押し上げられる。そして今の射精で、少年はコンドームを全て消費した。ベッドの端には十を超える使用済のゴム袋が置かれ、それだけの回数、膣内に擬似射精を許した証としてマルティナを精神的に辱める。

「はああ……♥♥」  
(私……♥ ぱふぱふするだけだったはずなのに♥ こんなに出されたの……♥♥)

【ふー……出た出た。ところで、今のでゴム切らしちゃったんだけど……】

「っ?!♥♥」

今し方に使用し終えたゴム。それを少年が外すと、中に詰まった精液の匂いがマルティナの鼻孔に届く。十数回と同じことをさせられているが、濃厚な雄臭の威力も変わらず、マルティナは胎の底から発情させられる。

(……………ハメたいっ…………♥♥)

遠回しに提案される、生での挿入。その甘美な誘惑に、思考の間もなく本能が求めてしまう。

(でかちんぽ♥♥ 気持ち良すぎるでかちんぽでハメたい♥♥ ハメられたい……でも…………♥♥)

ゴム越しでこれだけの快楽を得られるのだ。生だとどれほどの快楽、絶頂に至れるのか、マルティナには想像もつかない。

挿入願望、被虐願望が膨れ上がる。だが、やはり本番行為は規則違反であるのも事実。しかも生で……とあっては理性のブレーキがかかり、シーツを掴んで這いずり逃げようとする。

(でもダメ♥♥ あんなちんぽにハメられたら♥♥ 孕むっ♥♥ 絶対に孕まされるっ♥♥)

規則に反することも避けるべきだが……何より恐ろしいのは、少年の精力、巨根の威力だ。

信じ難い絶倫力は、ゴム越しですら子宮を屈服させてくる。そんな底なしの肉根を生で喰らおうものなら、妊娠の危険性があまりにも高過ぎる。

少なくとも受精はするだろう。そこまで堕ちてしまうのも爛れた快楽を得られるかもしれないが、女としての矜持が簡単には許さない。

(孕んだらこいつのモノに♥♥ 所有物になっちゃう♥♥ それはダメ♥♥  
初めて会った子に♥♥ 孕まされるなんて…………♥♥)

プライド、意地、そして今後の性生活。堕ちるのもいいが、もっと快楽を得る、性経験を得るためにも、妊娠だけは避けなければならない。

(もっと色んなちんぽを味わいたいのに♥♥ 孕んだら♥♥ このでかちんぽのことしか考えられなく……)

【そんなマネするってことは、ハメて欲しいってことだよな】

「っ?!♥♥」

気付けば脚が左右に開き、尻を上下に振っていた。明らかに雄を誘う動きだ。

頭の中では少年を拒もうとしていたマルティナ。しかし肉体は既に屈しており、無意識に種乞いの誘惑をしていたのだ。

「ちがっ♥♥ これはっ♥♥」

【わかってるわかってる。ムリヤリされたいんだよね?】



ここまで浅ましく求めてしまっていたら、もう言い逃れできない。少年もそこまで分かっている、あえて挑発的な言葉を選びながら、ゴムから解放された肉幹を宛がう。

途端、陰唇が急激に発熱。ゴム越しでは味わえない本物の雄熱が牝本能を炙り出し、更なる欲情に駆られていく。

腰がまた一つヒクンと動いて浮き上がり、挿入を促す。駄目だと思えば思うほど、膣道がうねって肉幹を待ち受けてしまい……

(生ちんぽっ♥♥ ダメなのにいいっ♥♥)

体験版はここまでです。続きは製品版で！